

タケダ・ウェルビーイング・プログラム 2022 成果報告レポート

助成番号 22-2-1

プロジェクト名 天井の先の宇宙-星空の下でつながろう

団体名 一般社団法人星つむぎの村

所在地 山梨県

助成額 146万円

設立年 2016年

URL <https://hoshitsumugi.org/>



（団体について）

一般社団法人星つむぎの村は、「すべての人に星空を」をミッションに、プラネタリウムや星空観望会、星に関するさまざまなイベントを行っている団体です。特に、本物の星空を見るのが難しい、長期療養中の子どもたちやそのご家族、医療関係者などに星空を届ける「病院がプラネタリウム」では、これまでに延べ8万人を超える人たちに楽しんでもらっています。

直接出向く「出張プラネタリウム」のほか、コロナ禍も大活躍中の非接触で行える「フライングプラネタリウム」、オンラインで子どもたち同士が交流しあう「星の寺子屋」などを通して、同じ星空の下、障害や病気、環境などあらゆるバリアを超えて、共に生きる小さな社会をつくりたいと願いながら活動しています。

また、その小さな社会をさらに体現化するために、誰もが安心して満天の星を見に来られる宿泊コテージ「星つむぎ家」を現在建設中です。

（助成による活動と成果）

①星つむぎの村のプラネタリウムを伝えるプロモーション動画

2019年にオンエアされた番組「宙先案内人ー星と人をつなぐ出張プラネタリウム」を制作した山梨放送（YBS）と協働しながら、あらたな撮影も行い、プロモーション動画を制作しました。何よりも、出張プラネタリウムやフライングプラネタリウムを体験しているときの子ども達の表情は、「百聞は一見にしかず」で、プラネタリウムがどれだけ幸せな空間であるかを感じていただいています。

2022年7月7日にリリース。 <https://youtu.be/j8sYKf4KHms>

②在宅療養中の子どもたちと家族への「フライングプラネタリウム」

5件の在宅向けフライングプラネタリウムを6～8月の間に行いました。中には、このフライングプラネタリウムがきっかけで、もっと一緒に何かやりたい、と村人（星つむぎの村のボランティア）になっていただいた家族もいたり、関係する団体に紹介してくれるなど、その後もつながりが広がるような機会となりました。

また、これらの活動の流れを受けて、最近はターミナルのお子さんのご家族やその関係者が、フライングプラネタリウムを依頼してくる件数が増えています。

③星の寺子屋と合宿

星の寺子屋は、毎月2回実施しました。今年度は特に、山梨県北杜市で合宿をすることを意識しながら、星つむぎの村の拠点からオンラインを実施し、自然や農体験を多く取り入れました。7～8月の3回には、武田薬品工業株式会社さまからのボランティア参加が多くあり、病気や障害を持つ子どもたちと一緒に時間を過ごすことができました。

また、2023年5月13～14日、「星の寺子屋プレアデス合宿」を行いました。6名の重心児や医療的ケア児と12名のきょうだいやそのほかの子どもたち、18名の保護者、14名の講師やサポーター総勢50名が2日間、温かくて優しい、笑いの絶えない豊かな時間を過ごすことができました。また、8名の子どもたちが、オンラインで参加することによって、その空気感を多少なりとも共有することができました。

（残された課題、新たな課題）

「フライングプラネタリウム」をはじめたきっかけは、余命宣告された少年へのプラネタリウムが、間に合わなかったという悔しさからであったので、現在、ターミナルなお子さんのご家族や関係者から声がかかる回数が増えてきたことは、大変ありがたいことだと感じています。一方、フライングプラネタリウム実施のための経費は、個人負担には大きすぎると感じており、特に急な対応のためには、常に寄付を集めたり、助成金を獲得したりする必要があると感じています。私たちの活動をさらに知っていただく効果的な広報も、あわせて考えていく必要があります。

星の寺子屋合宿は、今回はちょうど6組のバギーや車いすユーザーの子どもたちが参加しました。会場となったあおぞら共和国は5棟のコテージをフルに使用しましたが、バギーや車いすユーザーは6組で最大になります。来年以降、さらに希望者が増えたときに、どのように対応していくか、時間差を設けるなどするか・・・などは今後の課題です。また、対面とオンラインのハイブリッドを、より効果的にスムーズにできるような対策をしたいと思います。

（活動の背景・社会的課題）（団体からのメッセージ）

私たちは、なかなか本物の星空を見られない人たちに星空を届ける、という活動を通して、障害や病気を持つ子どもや大人たちに多く出会い、仲間になってきました。仲間になるまで、彼らの日常を想像はしても、理解に至ることがあまりありませんでした。そして、社会の中にはまだまだ無意識のうちの差別意識というものが多くあることを感じています。ボランティアである村人の多くも、経験が少ない間は、「障害を持つ人たちにどう接してよいかわからない」という戸惑いを持っている人たちも少なくありません。

だからこそ、「一緒に過ごす」ことが、人間のふれあいをベースにした温かいつながりづくりに欠かせないことを身をもって感じています。星空が教えてくれる人々の平等性を、頭だけではなく体で実感できることこそが、一人ひとりの幸せを、そして社会の幸せをつくっていくことになる、と信じ、「共に生きる社会」を目指していきたいと思っています。

以上